

吉田無逸を送る序

(丁巳幽室文稿) 安政四年(一八五七) 九月五日 二十八歳

吾が邑は萩府の近郊に在り、人最も学を好むと称せらる。何如せん、近来乃ち古に如かざるを。吾れ帰囚三年、敵に世と謝す、ここを以て邑中の風教、一切これを度外に措けり。独り三無生なる者あり、窃かに来り吾れに従ひて遊ぶ。無逸は其の一なり。三無、余のかくの如きを惜しみ、余の在獄の知己富永有隣を囚中より脱し、以て邑事を商議す。ここに於いてか、有隣は三無の与に為すあるべきを知り、其の母を南都に省するや、無逸を携ふ。無逸蓋し言論の外に得ることありしならん、帰るや先づ邑中の行なき者を扱ひ、三生を得たり、曰く音、曰く市、曰く溝。無逸示すに君父の大便を以てし、以て之れを感動せしむ。三生深く自ら克責し、遂に以て学に向ふ。無逸乃ち孝経の孝始孝終の二句を録して、以て之れを示す。三生皆泣き、指に針して血を取り、留めて以て信と為す。無逸も亦慨然として、血を留めて以て之を証し、因つて介して余に見えしめて託を為す。余、文三篇を作りて以て三生に贈る。

已にして秀美、記録所の胥徒を以て、将に駕に従ひて東行せんとし、贈言を請ふ。顧ふに、余、無逸と居りしこと一日に非ず、無為に語る所以のもの、寧んぞ尽さざるあらんや。乃ち姑く前の三文を録し、其の由を言ひて贈と為す。然れども吾れ是れに因つて感ずることあり。程明道曰く「一命の士、苟も心を愛物の存せば、人に於いて必ず済す所あり」と。誠をこれ謂ふなり。此の説や、吾れ能く之れを言へども、今は則ち無逸に愧づるあり。無逸亦以て往くべし。胥徒の事たる、繁雜瑣屑、日に以て俛焉たるも、而も為すに足るものなし。間

にして出でば、俗吏儼然として以て之れに面臨す。才気ある者、一たび陥らんか、破れずんば則ち折けん。唯だ無逸は則ち誠を以て之れを遣らんのみ。胥徒の類たる、群然雑処し、其の嘗為する所、酒色に非ずんば則ち財利にして、其の言未だ嘗て義に及ばず。才気ある者、一たび投ぜんか、怒らずんば則ち阻まん、唯だ無逸は則ち誠を以て之れを動かさんのみ。聖人の道、蓋し云へらく「君子、道を学ばば則ち人を愛し、小人、道を学べば則ち使い易し」と。三生は吾れ已に之れに任ず。有隣あり、二無あり、吾が邑以て憂ひなかるべし。此の行更に三生に勝る者を得て来れ。然りと雖も、吾れ嘗て無逸と語りしこと、徒にかくの如きのみには非ず。江戸も亦一大都会なり、無逸更に其の大なるものを觀よ。遂に以て贈と為す。

解説

安政四年八月、吉田栄太郎（無逸）が江戸に出役する際に贈った送叙である。そこには、栄太郎が指導していた音三郎（彼はこの時、十七歳、市之進や溝三郎と同じく吉田栄太郎に伴われて松下村塾に来た「無頼」の少年の一人である。松陰は音三郎が初めて来塾した時、彼の「容止温詳」な様子をみて「一見して与せり」として指導に乗り出している）、市之進、溝三郎の三少年は確かに引き受けたことを述べるとともに、江戸での胥徒と云う仕事に栄太郎がうまく適応するかどうかを憂慮している。胥徒の仕事は繁雑瑣屑、やってもやっても切が無く、休みの時の外出も上司が厳しく様子を聴くといった具合で、才気ある者は、ややもすると破れるか折けるか、しかねないものである。だから栄太郎の才気と頑質を知る松陰は心配で、誠を以て事に当ること、また折角経験する大都会である、「無逸更に其の大なるものを觀よ」と励ましている。なお、八月二十八日付の松陰から栄太郎に宛てた書簡によると、「上張地一」を贖として贈って居り、また栄太郎を自分の志を継いで欲しい人間として期待していたことがわかる。

用語解説

吉田無逸を送る序 〓 安政四年九月五日、吉田栄太郎（稔磨）が藩主に従って江戸へ発つ時の送別の言葉。安政四年八月二八日、吉田栄太郎宛の書簡。

吾が邑 〓 松下村。松陰誕生の地。

萩府 〓 萩藩（長州藩）の都府。

何如せん、近来乃ち古に如かざるを 〓 どうしたものか。近頃は昔のように学問を好む気

風が失われていることを。

巖に世と謝す 〓 嚴重に世間との交わりを絶つ。

風教 〓 道德によつて感化し教化すること。

度外に措けり 〓 考慮しなかつた。

三無生 〓 無咎（増野徳民）、無窮（松浦松洞）、無逸（吉田栄太郎）の三人。

富永有隣を囚中より脱し 〓 野山獄の同囚であつた富永有隣は、松陰らの熱心な釈放運動

により出獄を許された。知己は友人。

邑事を商議す 〓 松本村の事について相談する。

母を南都に省する 〓 有隣が故郷（現在の山口市陶郷上）に帰つて母の安否を覗う。

行なき者 〓 品行の良くない者。

三生 〓 音三郎、市之進、溝三郎。

君父の大恩 〓 主君や父から受けた大きな恩愛。

克責 〓 自分の非行を責めること。

孝経の孝始孝終の二句 〓 中国の経書の一つである『孝経』の「身体髮膚之を父母に受く。

敢えて家毀傷せざるは孝の始めなり。身を立て道を行ひ名を後

世に揚げ、以て父母を顧はすは孝の終りなり」の二句。松陰の

「丙辰日記」の表紙裏にもこの二句を記す。

指に針して血を取り、留めて以て信と為す 〓 血判のこと。誓いの印に指を傷つけて流れ

出た血で押印すること。信はあかし。証明。

介して 〓 なかだちをして。

文三篇 〓 「音三郎に贈る」、「市之進に贈る」、「溝三郎の説」の三篇。

記録所の胥徒 〓 吉田栄太郎は家計を助けるため、江戸の長州藩邸記録所の雑役夫に採用

され、藩主に従い上京した。

贈言 〓 送叙に同じ。人が旅立つ時、その人への期待や旅の意義、安全等を述べて、餞と

する文章。送叙、贈序は同様。

寧んぞ尽さざるあらんや 〓 どうして書き尽くさないでいられようか。

程明道 〓 一〇三二〜八五 北宋の儒者。名は程顥。弟の程頤と合せて二程子と言ひ、宋

学の基礎を築いた。世に明道先生と称せられた。著書『二程全書』

一命の死、… 人に於いて必ず済すところあり 〓 士以上の官吏は、もし物を愛すること

に心を留めたならば、人に対しても必ず利益をもたらすところがある。『十

八史略』卷七 宋)

繁雜瑣屑 〓 物事が多く入り混じって煩わしく、また細かくくだくだしいさま。

俛焉 〓 勤め励むさま。

間 〓 ゆとり。暇。

儼然として以て之れに面臨す 〓 おごそかでいかめしい様子で見下す。

一たび陥らんか、破れずんば則ち折けん 〓 一旦、気が滅入るか、或は志が破れるか、そ

うでなければ、挫折するであろう。

群然雜処 〓 大勢が入り混じって棲むこと。

酒色に非ずんば則ち財利にして 〓 酒や女性のことではなければ財産や利益のことです。

義 〓 正しい道義。

一たび投ぜんか、怒らずんば則ち阻まん 〓 一旦諦めるか、或は怒るか、そうでなければ

阻止するであろう。

「君子、道を学ばば則ち人を愛し… 使い易し」 〓 民を治める君子が道を学べば自然に人

民を愛するようになり、治められる人

民が道を学べば自然に使い易い従順

な人柄になる。『論語』陽貨)

此の行 〓 藩主の参勤に従い上京すること。

[吉田松陰の名文・手紙を読む【目次】](#) [ページへ戻る](#)

[吉田松陰.com](#) [トップページへ](#)